

頭の髪に白く積る。

二人は無言で、駈ケ落人の如く道を急いだ。

時々迂る。

通りすがりの人も稀に、異様な二人に注目する犬も居ない。扉を合鍵で開ける。雲間より朝日。戸の閉つてゐる軒下に幾度も休んだ。

女を抱擁して接吻して、互ひにあたゝめ合ふ程の余裕が、僕の心にはなかつた。

只たましひを失くした天使に憑かれたたましひの如く、かはうそに化かされたか女も、闇に飛ぶ虫を凝視めながら、

『此處から何うか、お願ひだから歸して下さい』と身を悶えた。

石橋の所まで遂々來た。

僕の家まで來てくれないと承知しない。

僕は途で斃れるかも知れないと言つたけれど、女は小走りに後も見せないで歸つて行つた。

僕は嘆き苦しんだ。

暁も五日すも幾分か來た。